

オスカー・ワイルドと演劇

澤 井 勇

本日は実践女子大学英文学科主催公開講座にお出でいただきまして、まことにありがとうございます。今回のテーマは「ワイルドと演劇」ということであります。一応わたくしは講師として出席してはおりますが、コーディネータの立場をとらせていただきまして、まずは、いまなぜワイルドなのか、またなぜワイルドの演劇なのかということをご説明申し上げ、さらにワイルドの生涯とワイルドの演劇についてその概略をご紹介させていただくことにしたいと思います。

1、実践女子大学とオスカー・ワイルド

〈ワイルド・コレクション〉

じつは、実践女子学園は今年創立110周年を迎えますが、実践女子学園の創立者であります下田歌子¹先生がお生まれになったのは1854年でありまして、今年には生誕155周年にあたります。ところが、奇しくもオスカー・ワイルドが生まれましたのも1854年でありまして、今年にはワイルド生誕155周年にあたる年でもあります。そこで、わたくしとしましては今年を、実践女子学園の創立者下田歌子先生の生誕155周年と併せましてオスカー・ワイルドの生誕155周年をも記念する年にしたいと思うのでありますが、しかしそれよりも何よりも、実践女子大学の図書館には、国内ではもちろんのこと世界でも珍しい、貴重なワイルド関係資料がコレクションとしてありまして、このことをこの際広く皆さんに知っていただきたいと思うわけであります。

ワイルド関係資料と言いますのは、ワイルドの作品で今ではほとんど手に入れることのできない初版本ですとか、直筆書簡、その他当時の新聞雑誌に載ったワイルド関係の記事の切り抜き帳や、ワイルドの戯曲を上演した際のプログラム、ポスター、さらには一寸かわったところでワイルドの「髪の毛」がありまして、これは世界で唯一、実践女子大学図書館だけが持っているも

のであります。

実践女子大学がこうした貴重なワイルド関係のコレクションを所蔵するようになりました切っ掛けは、かつて英文学科に本間久雄²先生という先生と小倉皐³先生という先生がいらっしゃったご縁によるものです。

本間久雄先生はご存じの方も多いかと思いますが、高名な英文学者であり、また明治文学の研究者としても令名が高かった方ですが、もとは早稲田大学の先生で、早稲田を退職された後、実践で教えられた方で、わが国におけるワイルド研究の先駆者であり、日本で初めてオスカー・ワイルド研究で博士号を取られた方です。が、先生が持ってらしたワイルド関係の蔵書や研究資料——その大半は、先生が、昭和3年（1928年）にイギリスに行かれて求められたものですし、また今お話ししましたワイルドの「髪の毛」というのも、その時に先生がワイルドの二番目の息子さんであるヴィヴィアン・ホランドにお逢いになって、ヴィヴィアン・ホランドから直接いただいたもので、その「髪の毛」もそこに入っているわけですが——こうした本間先生が持っておられたワイルド関係の蔵書や研究資料が、先生が亡くなられた後、ご家族のご厚意と、その当時英文学科の主任をなさっておられた小倉皐先生のご尽力で実践に寄贈されたわけです。

小倉皐先生という方はもちろん、もうすでに鬼籍に入っておられますが、SF小説の翻訳家としても有名でしたが、じつは小倉先生もワイルドの研究家でありまして、本間先生について日本で二人目の、ワイルド研究で博士号を取られた方でいらっしゃいます。

このようにして本間先生が持ってらしたワイルド関係の蔵書や研究資料を実践女子大学の図書館が所蔵することになり、さらにその後、これにかなりの量のワイルド関係資料が追加されまして、現在のワイルド・コレクションが整ったわけでありまして。最近、ワイルドの直筆書簡が2通ばかり、新しく追加されております。

これらのワイルド・コレクションの一部をこの大教室の前の香雪記念館展示室で展示していますので、是非ご覧いただけたらと思います。

こうしてワイルドは実践女子大学と少なからず縁があるのだということを申し上げて、そのことを広く皆さん方に知っていただきたいと思うわけですが、では、いまなぜワイルドの演劇なのか、ということではありますが、

〈いまなぜワイルドの演劇なのか〉

ワイルドの作品は詩、童話、小説、評論、戯曲と、そのジャンルは多岐にわたっていきまして、わが国ではとくに童話の『幸福な王子』などは、みなさんも子供のころ少年少女文庫などで読まれたり、あるいは学校の英語の時間などで読まれた方もおられるかもしれませんし、またワイルドの唯一の長編小説『ドリアン・グレイの肖像』なども岩波文庫や新潮文庫に入っていますからお読みになっている方もおられるかもしれませんが、しかし映画や舞台、ライブやイベントなどを紹介しています『ピア』を見ますと、『サロメ』が東京のグローブ座をはじめ名古屋、北陸、福岡などで数多く上演されています。またつい先達てには『ドリアン・グレイの肖像』が、吉祥寺でだったと思えますが、上演されていましたが、とくにわが国における『サロメ』の上演は、遠くは川上貞奴にまでさかのぼり、その回数は数えきれず、四～五年前には神奈川県立緑ヶ丘高校と東京の私立聖女子学園の高校生が舞踊詩『サロメ』をギリシアで演じたりもしております。こうしてワイルドの演劇は『サロメ』に限定されるとはいえ、わが国ではかなりポピュラーになっておりますので、今回の公開講座は「ワイルドと演劇」というテーマで開催することにしたわけです。

2、ワイルドの生涯

さて、ここでオスカー・ワイルドについて、その生涯の概略をご紹介しますおきたいと思えます。お配りした「オスカー・ワイルド年譜」をご覧くださいながらお聞きいただきたいと思えます。

オスカー・ワイルド年譜（ゴシック体太字は戯曲）

1854年	10月6日	ダブリン（アイルランド）に生まれる
64年（10歳）		ポートル・ロイヤル・スクール入学
71年（17歳）		トリニティ・コレッジ（ダブリン）入学 マハフィー教授（ギリシア史）に師事
74年（20歳）		オクスフォード大学モードレン・コレッジ入学 ラスキン、ペイターに会う
77年（23歳）		マハフィー教授らとギリシア、イタリア旅行

- 78年 (24歳) 『ラヴェンナ』(詩)によりニューディゲイト賞受賞
オクスフォード大学を首席で卒業
- 82年 (28歳) アメリカ講演旅行
- 84年 (30歳) コンスタンス・メアリー・ロイドと結婚
- 85年 (31歳) 長男シ ril 誕生
- 86年 (32歳) 次男ヴィヴィアン誕生
『ウーマンズ・ワールド』の編集長となる
- 88年 (34歳) 『幸福な王子とその他の物語』(童話)(その他の物語
に「ナイチンゲールとバラ」、「わがままな巨人」、
「忠実な友」、「すばらしいロケット」)
- 89年 (35歳) 「W・H氏の肖像」(評論)
- 91年 (37歳) 『パデュア公爵夫人』ニューヨークで上演。ただし『グ
イード・フェランティ』というタイトルであった。
「社会主義下の人間の魂」(評論)
『インテンションズ』(評論) (「嘘の衰退」、「ペン、鉛
筆、そして毒」 「芸術家としての批評家」、「仮面
の真実」を収める)
『アーサー・サヴィル卿の犯罪とその他の物語』(小説)
(その他の物語に「秘密のないスフィンクス」、「カ
ンタヴィルの幽霊」、「模範的な金持ち」)
アルフレッド・ダグラス (愛称ボウジー、クインズベ
リー侯爵の三男、ワイルドより16歳年下) に会う
『ドリアン・グレイの肖像』(小説)
『ザクロの家』(童話) (「若い王」、「王女の誕生日」、
「猟師とその魂」、「星の子」を収める)
『サロメ』(フランス語)をパリで執筆
- 92年 (38歳) 『ウィンダムミア婦人の扇』初演
- 93年 (39歳) 『サロメ』(フランス語)出版
『なんでもない女』初演
- 94年 (40歳) 『サロメ』(ダグラスによる英訳、ビアズリーによる挿
画)出版
- 95年 (41歳) 『理想の夫』初演
『まじめが肝心』初演

クインズベリ裁判（ワイルド、クインズベリ侯爵を誹毀罪で訴えるも侯爵は無罪）

ワイルド裁判（クインズベリ侯爵が釈放された同日、卑猥行為をした廉で逮捕される。二回の裁判で有罪となり、二年の重労働懲役刑。ベントヴィル刑務所に収監後、ワンズワース刑務所を経てレディング刑務所に移る）

- | | |
|------------|--|
| 96年（42歳） | パリで『サロメ』初演 |
| 97年（43歳） | 刑務所を出所。セバスチャン・メルモスという仮名でフランスのベルヴァールに住む |
| 98年（44歳） | 『レディング刑務所の歌』（詩）
妻コンスタンス没（享年40歳） |
| 1900年（46歳） | 11月30日、パリの「オテル・ダルザス」で死去 |
| 05年 | 『デ・プロフンディイス』（「深淵より」の意。邦訳名『獄中記』）出版 |

〈アイルランドに生まれる〉

ワイルドが生まれたのはアイルランドのダブリンです。アイルランド生まれの作家と言いますと、古くは『ガリヴァー旅行記』を書いたスウィフトがおりますが、ワイルドと同時代の人では、あの『マイ・フェアレディ』というミュージカルの原作者で、ノーベル賞作家であるB・ショウですとか、詩人・劇作家でやはりノーベル賞を貰ったW・B・イェイツですとか、『ユリシーズ』を書いたジョイスですとか、20世紀に入りますとアイルランドで生まれてフランスで活躍しました作家で、『ゴドーを待ちながら』という有名な戯曲を書いたノーベル賞作家のサミュエル・ベケットがおります。

アイルランドという国は、長い間、大英帝国の支配下にありまして、アイルランド共和国として完全に独立したのは一九四九年のことですが、しかしそれは南アイルランドだけのことでして、北部アイルランドはいまなおイギリスの支配下にあります。それだけに、今挙げましたアイルランド生まれの作家たちには、それぞれに祖国への思い入れがあるようにも思われますが、しかしイェイツのようにアイルランド文芸復興運動を起こした作家もいれば、ジョイスのように祖国を捨てた作家もいますし、ワイルドなどはほとんどイギリス上流階級の世界しか作品に描いておりません。

〈ワイルドの父〉

さて、ワイルドのお父さんは、眼科・耳鼻科のお医者さんでした。近代耳鼻科学の父とも呼ばれたほど優れた学者であり、またヴィクトリア女王付きの医者を迎えられるほど優れた医者であっただけでなく、医学とは別にアイルランドの考古学や民間伝承にも興味をもって、そちらでも功績を挙げた人です。ただ、どうも、女性関係がよろしくなくて、女性患者をクロロホルムで眠らせて陵辱したり、結婚する前他の女性に3人の子供を産ませていて、したがってワイルドには3人の異母兄弟がいたとか言われています。

〈ワイルドの母〉

お父さんは、そんなわけですから、ワイルドのお母さんは、夫の女性関係にはだいぶ悩まされたようです。彼女は弁護士の娘でしたが、文学的才能があって、詩集を出したり、フランス文学やドイツ文学の翻訳をしていた人です。ワイルドの文学的才能は母親譲りであろうとも言われています。

また、このお母さんは土曜の午後はいつもパーティを開く大変社交好きな女性であったとか、年齢をいつも5歳若くサバよんでいたとか、晩年になってからは顔に皺が見られるのを嫌って、夕方の五時以降にならないと客には会わず、日中でもカーテンを閉めて、ランプに赤い覆いをかけただけでなく、着ているものも、かなり派手なものを着ていたとか、言われています。ですから、よほど老醜をさらすことを嫌っていたということです。

〈幼少のワイルド〉

そんな両親のもとにワイルドは次男坊として生まれました。しかし、母親は女の子が欲しくてしかたがなかったために、ワイルドが生まれる前から女の子の着るものしか用意していなかった。そんなわけで、ワイルドは5歳頃まで女の子の服を着せられていたと言われます。

〈ポートラ・ロイヤル・スクール時代〉

ワイルドは10歳で北アイルランドにあるエリート校ポートラ・ロイヤル・スクールという学校に入ります。学校では勉強はよくできたのですが、ただ数学だけはからっきしダメだったそうで、また運動も苦手で、関心がなく、そのため、友達のあいだでもあまり人気はなかったようです。

〈トリニティ・コレッジ時代〉

17歳で、アイルランドの首都ダブリンにあります名門校トリニティ・コレッジにすすみます。このコレッジでは、古典学者のマハフィー教授という先生と出会い、この先生のもとでギリシア・ローマの古典を学びます。そして、

キリスト教精神とは対照的な人間中心主義の古代ギリシア精神、いわゆるヘレニズムへの関心をつのらせます。

〈オックスフォード時代〉

そして、20歳でオックスフォードのモードリン・コレッジに入学します。

ここで、ワイルドは二人の先生に出会います。一人は、ジョン・ラスキン⁶というオックスフォードの美術史教授で、美術評論家、社会思想家でもあった人ですが、この先生は芸術とか美というものは、倫理的でなければならないと言った人であり、社会改良のための労働を説いた人です。

そして今一人はウォルター・ペイター⁷です。ペイターという人はオックスフォードで特別研究員として一生を過ごした人であり、芸術評論家、古典研究家であった人ですが、このペイターから芸術について、唯美主義^{フエロウ}ということを教わりました。

唯美主義^{エッセティシズム}といえますのは、あらゆる価値のうちで美を最高の価値とする世界観ないしは人生観ですが、芸術においてはイギリスの伝統的な道徳的芸術観やヴィクトリア朝の功利主義的理想主義に反対して、芸術は何かのためにあるのではなく、芸術はあくまでも芸術のためのものであるとする「芸術のための芸術」を標榜する芸術至上主義で、さらに自然を排斥して芸術独自の想像的世界を作り出し、芸術とは感覚的に美しいものであり、感覚的に美しくないものは芸術ではないという考え方でして、この考え方を実生活にも持ち込もうとさえするものです。

こうしてラスキンとペイターという二人の先生との出会いがあり、また、このオックスフォード時代に恩師マハフィー教授と連れだってギリシア・ローマを旅行しています。トリニティ・コレッジ時代にマハフィー先生のもとでギリシア・ラテンの古典を学び、すでにヘレニズムについての関心をつのらせていましたが、このローマ・ギリシア訪問は、非常に精神的影響を受けて、古典芸術にたいして目を開かせられ、ヘレニズムへの関心を決定的なものにしただけでなく、宗教的にも、もともと関心のあったカトリック教を棄てたとされています。

さらに、このギリシア・ローマ訪問の際にラヴェンナという、多くの遺跡を残す古い町をワイルドは訪れています。その時のことを「ラヴェンナ」という詩に詠い、この詩でニューディゲイト賞という賞を獲っています。ワイルドにとって、これはおおやけに認められた最初の作品です。

〈オックスフォードを出て〉

こうして後、ワイルドはオクスフォードを卒業します。そしてロンドンに出ます。しかし、もちろん、ワイルドはまだ無名です。ですが、ワイルドはもともと非常に目立ちたがり屋でありまして、なんとか世間に自分を売り込みたいわけです。さらにワイルドは気取り屋でもありまして、そこでワイルドは、ロンドンの目抜き通り、銀座通りでありますピカデリー・サーカスあたりを、髪はロング・ヘアーで、ビロードのジャケットにニッカボッカのズボン、そして絹のストッキングをはいて、ケシの花、ユリの花、あるいはヒマワリの花をジャケットのボタン・ホールに差したり、片手に持ったりして、歩き回ったわけです。この出で立ちは唯美主義者ワイルドにからめて唯美的衣装（エッセティック・コスチューム）と呼ばれましたが、言うまでもなくロンドンっ子のドギモを抜いて、一躍ワイルドの名が世の中に知れ渡ることになります。知れ渡るだけでなく、そんなワイルドをモデルにした劇が上演されたりさえしています。

〈講演旅行〉

その後、アメリカへ講演旅行に出かけたり、イギリスでも講演旅行をしたりしますが、講演の内容はパイターの唯美主義の受け売りであったり、焼き直しであったりで、一般にはあまり受け入れられるものではなかったようです。こうした講演旅行でそれなりのお金は手にしたようですが、生活が楽になるほどのものではなかったようです。

〈結婚〉

そうこうして、ワイルドは30歳で結婚します。結婚した相手はコンスタンス・メアリ・ロイドという女性ですが、彼女は有名な弁護士のお嬢さんで、持参金に祖父から受けついだ遺産があって、この結婚によってワイルドは生活にゆとりが出てくることになります。

結婚した翌年、長男シビルが生まれ、さらにその翌年、次男ヴィヴィアンが生まれます。長男のシビルは後に第一次世界大戦で戦死しますが、次男のヴィヴィアンは、先ほどお話ししたように、本間先生が会われた方ですが、20世紀にはいりまして、ワイルドの全集を編纂したりして天寿をまっとうしております。

〈作家として世に出る〉

ワイルドが作家として本格的な活動に入るのは彼が34歳になってからで、大学を出てから10年を経てのことです。

まず、『幸福な王子とその他のお話』という童話集を出版したことから始まって、長編小説の『ドリアン・グレイの肖像』ですとか、対話形式で自分の芸術観を語った評論集である『意向集』（『インテンションズ』）ですとか、一幕物のドラマである『サロメ』ですとか、『ウィンダミア夫人の扇』や『なんでもない女』や、『理想の夫』、『真面目が肝心』などの、いわゆる風習喜劇を、つぎつぎと発表していき、ワイルドの人気も最高に高まり、ワイルドは人生における絶頂期を迎えることとなります。

〈裁判と下獄〉

しかしながら、ワイルドはこうして人生における絶頂期を迎えたところで、大変な悲劇に見舞われることとなります。

じつは、ワイルドは30代なかばをすぎて（年譜37歳）、作家としての名声が高まってきたところで、ワイルドのオクスフォードの後輩で通称ボウジーと呼ばれていたアルフレッド・ダグラスというハンサムな貴族の若者と出会って、同性愛の関係をもつこととなります。

しかし、まもなくしてワイルドは、ボウジーの父親であるクイーンズベリー侯爵から息子を破滅に追いやっているとして嫌がらせを受け、非難されることとなります。（年譜41歳）これに怒ったワイルドはクイーンズベリー侯爵を侮辱罪で告訴するのですが、逆に同性愛者として告訴されまして、裁判にかけられ、結局は、ワイルドは裁判に負けて、2年間の重労働懲役刑に服することとなります。

同性愛というのは、古代ギリシア時代には、たとえばソクラテスなどはいつも美少年を従えていたといわれるように、とくに問題にされることもなかったようですが、その後キリスト教がヨーロッパに入ってきてまして同性愛が禁止されるようになりますと、これが悪だと考えられるようになってきます。しかしワイルドの時代になりますと、特にオクスフォードなどの大学では古代ギリシア、それこそヘレニズムへの関心が強まっていただけでなく、学生は男子の全寮制ですし、もちろん若いわけですから、同性愛に走る傾向も出てきていたようです。

しかしながら、ワイルドは同性愛者であったとは言っても、結婚して子供もいるわけですから、根っからの同性愛者ではなかったでしょうし、また本当に根っからの同性愛者であれば、ちょうどサマーセット・モーム⁸、あの『人間の絆』とか『月と6ペンス』という作品で知られるサマーセット・モームがそうであったように、ひた隠しにかくすものですが、ワイルドはこれを

隠さなかっただけでなく、むしろ同性愛がなぜ悪いのか、と開き直っていたわけですし、根は純情なお坊ちゃん育ちの人間が悪ぶって見せた程度のものでしかなかったのだろうと、私には思われます。

〈孤独な最期〉

こうした事件があって、人生の絶頂期からどん底に突き落とされたワイルドは、2年間の刑に服しますが、その間にお母さんは亡くなり、奥さんのコンスタンス夫人は離婚しまして、子供たちの名字も、子供たちの将来を考えて、ワイルドからホランドに改名しております。しかし、ワイルドにたいする彼女の気持ち、ワイルドへの思いは変わらなかったようであります。が、奥さんは、ワイルドが刑務所を出ました翌年、この世を去っております。

ワイルドは出所しました後、イギリスにとどまることもできず、友人たちも去って行って、一人さびしくフランスの片田舎に引きこもり、『レディング牢獄の唄』という、刑務所で目撃した絞首刑の悲惨さを詠った詩を書きます。そして刑務所を出た翌年、パリのホテルで、ごくわずかな友人に看取られながら亡くなっています。享年46歳でありました。病名は脳膜炎と言われていますが、一説にはオクスフォード時代に娼婦から移された梅毒ではないかとも言われています。いずれにしても獄中生活が彼の死期を早めたのではないかと思います。

彼のお墓は、スフィンクスをかたどったかなり大きなお墓ではありますが、現在、パリのパール・ラシェーズという墓地にあります。正門から入りますと、すぐ右手にあります。

ワイルドは獄中にいたとき、こんなことを言っています。「父が私をオクスフォードに送った時と、社会が私を牢獄に送った時とが、私の人生における二つの大きな転換期であった」と。確かに、ワイルドの生涯は、オクスフォードに入った時は人生の隆盛に向かう転換期となり、牢獄に入った時は、人生の失墜に向かう転換期となったと言えます。46年という決して長くはない人生のなかで、しかも僅か10年足らずの短い作家生活のなかで、絶頂期を迎えるとともに人生のどん底をも経験するという、まことにドマチックな生涯をワイルドは送ったわけです。

こうした生涯をオスカー・ワイルドは送ったわけですが、ワイルドと演劇ということで、少しばかり紹介させていただきます。

3、ワイルドと演劇

ワイルドが活躍したのは1890年代という、いわゆる19世紀イギリスの世紀末ですが、この時代のイギリス演劇を作ったのはワイルドともう一人バーナード・ショウの二人でして、イギリスの作家では他に後世にのこるようなめぼしい作家はおりません。ワイルドとショウ以外では、むしろノルウェーの劇作家イブセン⁹などが新興演劇の担い手としてもてはやされていました。

〈イブセンの問題劇とショウ〉

イブセンと言えば、『人形の家』とか、『幽霊』、『民衆の敵』その他、多くの作品がありますが、『人形の家』や『幽霊』のように家庭の結婚生活における女性の生き方を問題にしたり、『民衆の敵』のように社会問題を扱ったりするなどして、現実の社会に内在する問題点を描き出して読者や観客に訴え、問題提起する、いわゆる「問題劇」の劇作家ですが、B・ショウはこのイブセンに強い影響を受けています。

とはいえ、ショウの戯曲は問題を提起して読者や観客に訴える問題劇であるというより、むしろ才気煥発な知的な対話、ときに人を煙にまくような逆説をまじえながら自分の思想を訴える思想劇であり、宣伝劇であるということが出来ます。

彼は、生涯をとおして禁酒主義、肉食主義を堅持した人ですが、思想的には社会主義的傾向があり、社会的な正義感、独立不羈の精神が強かったようです。社会的な活動としては、フェイビアン協会という平和的手段によるイギリス流の漸進的社会主義思想団体を作っております。フェイビアン協会という名称は、戦わずして敵を自滅させるような持久戦術をとったことで有名な古代ローマ将軍ファビウスの名に因んだものです。

ショウの演劇は思想性が強く哲学的で、たとえば代表作である『人と超人』——この超人というのは英語でスーパーマン (superman) ですが、これはドイツ語のユーベルメンシュ (Übermensch) を英訳したもので、そのまま訳すればオーヴァーマン (overman) となるべきところ、ショウはスーパーマンとしているわけで、こうした造語をすることで、なにかショウの独特な言語感覚みたいなものがあるように思われますが——この『人と超人』はショウ独自の創造的進化説 (creative evolution) を開陳しています。つまり、人類の幸福は全人類が肉体的にも精神的にももっとも優れた超人とならなくてはならない。そしてそうした超人の世界を作るには「生の力」(life force 宇宙

の推進力、想像力)が働かなくてはならないというのです。

〈ワイルドの演劇〉

こうしたバーナード・ショウにたいして、ワイルドの演劇は『パデュア公爵夫人』や『サロメ』のような悲劇と、『ウィンダミア婦人の扇』、『なんでもない女』、『理想の夫』、『まじめが肝心』などの、いわゆる風習喜劇に大別できます。『パデュア公爵夫人』はあまりポピュラーではありませんのでワイルドの悲劇といえども『サロメ』になりますが、これは後ほど富士川先生にお話をうかがいますので富士川先生にお願いしまして、ワイルドの風習喜劇について申し上げますと、この風習喜劇といいますのイギリスの社交界における風俗、習慣、恋愛などを風刺的に描いた喜劇でして、すでに17世紀頃からあるものです。ワイルドの風習喜劇も同じものですが、ただワイルドの場合は特にユーモアとウィットにとむ会話が展開されているのが特徴です。そこで、それをご紹介したいのですが、しかし、きちんとご紹介するにも、持ち時間(3、40分)をだいぶ過ぎていますので、その触りを『まじめが肝心』のはじめのところから、ほんの一部だけご紹介させていただいて、わたくしの責をはたさせていたくことといたします。

アルジャンン 独身者の世帯だと、なんだってこうきまって召使いがシャンペンを飲むんだらう？ 参考のために聞くだけだが。

レイン お酒が上等だからだと存じますが、はい。よく観察しましたところ所帯持ちのお宅だと一級品のシャンペンなどめったにございません。

アルジャンン へえ！結婚てそんなに人を墮落させるものかい？

レイン いえなかなかよろしいものでございますよ、はい。これまでのところわたくし自身はほとんどそうした経験をしておりませんが。たったいっぺん結婚したきりだものでして。わたくしとある若い女¹⁰との誤解が基でございました¹¹。

アルジャンン (ものうげに) おまえの家庭生活にはあまり興味がありません、レイン。

レイン さようで。あまり興味のある話題ではございません。わたしもめったに考えてみません。

アルジャンン ^{しごく}至極当然さね、確かに。もういいから。

レイン かしこまりました。(レイン、出ていく)

アルジャノン レインの結婚観はかなりたるんどる。じっさい、下流階級の者がお手本を示してくれないとすりゃ、いったい全体なんの取りえがあるんだ？¹²あの階級の連中ときたら、まるで道徳的責任ってものがないらしいや。

(新潮文庫の西村孝次訳より)

注

- ¹ 下田歌子 (1854-1936) 旧姓平尾 銆 (せき)。18歳で宮中に出仕し、時の皇后より和歌の才を認められ、「歌子」の名を賜る。下田猛雄と結婚し、下田姓となる。華族女学校 (後の学習院女子部) 学監兼教授を経て、1899年に帝国婦人協会私立実践女学校・女史工芸学校 (実践女子学園の前身) を創設。
- ² 本間久雄 (1886-1981) 英文学者、国文学者。早稲田大学名誉教授、実践女子大学名誉教授。『英国近世唯美主義の研究』で文学博士。『欧州近代文芸思潮概論』、『明治文学史』(上下)、『明治大正文学資料・真跡図録』他。
- ³ 小倉 皐 (1912-1991) ペン・ネーム「多加志」。英文学者、翻訳家。実践女子大学名誉教授。『仮面の真理—ポーズの作家オスカー・ワイルド』で文学博士。『イギリス世紀末文学概観』、『イギリス文学史要説』、『英米文学作家作品年表』(共著)、翻訳にG・グリーン『叔母との旅』、『ファー・コール』他。
- ⁴ アイルランド生まれの作家
- スウィフト (Jonasan Swift 1667-1745)
『ガリバー旅行記』、『桶物語』
- ゴールドスミス (Oliver Goldsmith 1728-1774)
『ウェークフィールドの牧師』
- シェリダン (Richard B. Sheridan 1751-1816)
『悪口学校』
- バーナード・ショウ (George Bernard Shaw 1856-1950)
ノーベル文学賞受賞。『ウォーレン夫人の職業』、『武器と人間』、『人と超人』、『ピグマリオン』(ミュージカル『マイフェアレディ』の原作)
- イエイツ (William B. Yeats 1868-1939)
ノーベル文学賞受賞。アイルランド文芸復興に尽力し、アイルランド文芸協会設立。『アシーンの放浪』、『めぐる階』、『鷹の井戸』
- ジョイス (James Joyce 1882-1941)
『ユリシーズ』、『フィネガンズ・ウェーク』

- ベケット (Samuel Becket 1906-1989)
ノーベル文学賞受賞。『ゴドーを待ちながら』
- ⁵ マハフィー教授 (John Pertland Mahaffy 1839-1919)
古典学者。トリニティ・コレッジ教授。
- ⁶ ジョン・ラスキン (John Ruskin 1819-1900)
美術批評家、社会思想家。『近代画家』、『建築の七灯』、『ヴェニス
の石』、『ごまと百合』、『この後の者にも』
- ⁷ ウォルター・ペイター (Walter Pater 1839-1894)
批評家、作家。『ルネサンス』、『エピクロス主義者マリウス』
- ⁸ サマーセット・モーム (William Somerset Maugham 1874-1965)
作家。『人間の絆』、『月と六ペンス』、『雨』
- ⁹ イプセン (Henrik Ibsen 1828-1906)
ノルウェーの劇作家、詩人。近代劇の父といわれる。『人形の家』、
『幽霊』、『ヘッダ・ガブラー』、『民衆の敵』
- ¹⁰ person を「若い女」と訳している。(筆者注) 若い女が 'girl' とか 'woman' とか 'lady'
とか自分の身分や身柄を明示したくないときに 'person' を使う。また召使いが下層
の未知の女の来訪をとりつぐときも、これを用いる。
- ¹¹ 「結婚というものは相互の誤解の上に成り立つ」と「アーサー・サヴィル卿の犯罪」
第一章でも述べている。
- ¹² しばしば作者は上流階級が下流階級にたいして行為の模範を示すべき責任があると
説いているが、ここではそれを逆説的にいっている。